

## 事務局通信

## JASTE35のお知らせ

## 「JASTE34

## 公開シンポジウム報告」

## 【2 ページ】



佐々木綾子さんの記事を  
掲載しました。

第35回日本熱帯生態学会年次大会(福岡)

日程:2025年6月27日(金) 午後 編集委員会, 評議会

6月28日(土) 午前 一般発表

午後 総会, 吉良賞授賞式・講演, 懇親会

6月29日(日) 午前 一般発表, 企画発表

午後 公開シンポジウム

会場:九州大学伊都キャンパス(〒819-0395 福岡市西区元岡 744)

大会事務局連絡先:百村帝彦(jaste35.fukuoka@gmail.com)

福岡での日本熱帯生態学会大会は、第23回大会(2013年)以来、12年ぶりの開催となります。今回は、九州大学熱帯農学研究センターと大学院農学研究院を中心に大会実行委員会を組織し、準備を進めています。第23回大会は市街地に近い箱崎キャンパスで行われましたが、今回は大学移転後の新しい伊都キャンパスでの開催を予定しています。

福岡は、活気あふれる博多・天神の街並みと、自然豊かな糸島エリアが楽しめる魅力的な場所です。学会での学びや交流に加え、地元ならではの文化やグルメも存分に堪能していただけます。

参加申し込みなどの詳細は、2025年2月以降にニューズレターや学会ウェブサイトでお知らせいたします。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

## 掲載記事

- 1 事務局通信  
JASTE35のお知らせ
- 2 JASTE34 公開シンポジウム報告 佐々木綾子
- 4 JASTE34 託児補助・サテライト企画報告 四方 篝
- 5 JASTE34 評価とダイバーシティに関するアンケート結果報告  
四方 篝・神崎 護

JASTE34 公開シンポジウム

# 『へしこ・魚醤のある暮らしー東南アジアと日本・地域の食』

佐々木綾子(日本大学生物資源科学部)

Report of JASTE34 Public Symposium

Fermented Fish Products in Livelihoods -Food Culture in Southeast Asia and Japan

Ayako SASAKI (College of Bioresource Sciences, Nihon University)

調査研究にかかわらず、常日頃過ごす土地を離れ他の場所で生活した経験を語る時、まず話題に上るのは食事ではないだろうか。

「食べる」ことにおいての人間のふるまいの多くは、本能として遺伝的に伝達されることではなく、生まれた後に学習した文化的な行為であるとされるが(石毛 1998)、それらを対象とした研究が「食生活史」を経て「食文化研究」として認識されたのは比較的最近のことである(江原 2019)。食文化研究は時代もジャンルも様々であり、研究方法も確立しているとはいいがたいが、同時に研究方法にとらわれることなく学際的視野を持って自由に実施できることも魅力であるとされる(前掲)。

研究者それぞれの興味関心により研究対象が際限なく広がるといえる食文化研究であるが、一方で課題も抱えている。文化地理学的視点から食文化研究を行う横山(2022)が自身の対象とする発酵食品研究の課題として挙げた 3 つの問題点:1)さまざまな専門分野の研究者がそれぞれの学会や研究会で成果を公表するため分野横断的に研究成果をつなぐ枠組みが存在しない、2)ある地域における食品の網羅的な研究は地域間比較の視点が弱く、反対に 3)地域間比較の視点で行われた研究は特定の食品しか扱ってこなかったことは、他の食品についても同様に提起できる課題であろう。

本シンポジウムは開催地・福井の伝統的食品である魚の発酵食品「へしこ」に着想を得、こうした課題へのひとつの試みとして企画されたものである。登壇された 3 名の研究者はそれぞれ異なる専門分野(応用微生物学・文化人類学)・異なる調査対象地(ラオス・カンボジア・日本)において魚の発酵食品を題材にしており、またもう 1 名の登壇者は地域の食文化・発酵食を伝える活動を行っている。それぞれ異なる視点からの発表により、東南アジア・日本それぞれの地域の食を支えてきた魚の発酵食品(へしこ・魚醤)の生産・利用・文化、また現代において注目される機能や魅力について議論することを目指した。

最初に、丸井淳一朗氏(国際農林水産業研究センター)に「ラオスの淡水魚でつくる魚醤『パデーク』を美味しく長持ちさせるには？」という演題で、伝統的な魚醤の製法とパデークの品質・衛生管理とのかかわりについて講演いただいた。「パデーク」とは淡水魚を塩、米ぬかと混ぜ合わせ長期間発酵させるラオスの魚醤であり、ラオス料理に欠かせない万能調味料として広く使われている。発表では、ラボにおける発酵実験とフィールドでの生産者への聞き取り調査(とパデークづくり体験)両方の成果として、伝統的製法における塩分濃度が乳酸菌の種類の決定だけでなく、食中毒の原因となるヒスタミンの発生抑制にも寄与していること等が紹介された。発酵食品生産にかかわる伝統知を科学的に評価することで、より安全かつ高付加価値なパデークの生産に貢献する可能性が示唆された。

次の山崎寿美子氏(愛国学園大学)「カンボジア農村における発酵食のある暮らし」では、カンボジアにおいて社会変化や民族間関係に関する文化人類学的研究を行う中で「美味しさに魅了された」魚の発酵食品について、それらの多様さや地域差、社会変化の影響等が解説された。カンボジアの発酵食品として一般的な魚に塩を加えて熟成させた「プロホック」と、カンボジアに移住してきたラオ人が魚に塩と米糠を加えて発酵させる「パデーク」それぞれの生産工程に関する多点調査から地域性・生業との関連が考察され、同じ名前と呼ばれる食品であっても生業や民族、環境によって多様な形態・食文化が生み出されていることが示された。今後、人々の移動(範囲・速度)やインフラ、嗜好の変化に伴い、伝統的発酵食品の生産・位置づけが変わる可能性が提示された。

後半は舞台を日本・福井県に移した。まず、木元久氏(福井県立大学)に「福井県・鯖へしこはなぜ旨いのか？」という演題で、「へしこ」の製法や機能に関する基本的な知識や最新知見についての解説と、福井県立大学創造農学科における学生による「へしこ作り」の調理実習の様子を紹介いただいた。「へしこ

とは、魚に塩を振って塩漬けにし、さらに糠漬けにした福井県若狭地方の郷土料理である。東南アジアでは一般的に川魚が食されるのに対し、福井県のへしこはサバやイワシ、フグを食材とする。特にサバが大漁であったことから、長期保存がきき、安定的においしさを保てる方法として、へしこが発展したといわれている。木元氏は伝統的製法の科学的評価を行いつつも、今後の課題として減塩やサバの漁獲高減少への対応、また加えて若い世代に対して発酵食品の持つ「合理性」についていかに実践を通し伝えていけるかが、今後もへしこ文化が継承される鍵であると述べた。

最後はへしこの継承活動に取り組む南清美氏（うみの宿さへい・福井県立大学特任講師）に「福井のへしこ食文化とその継承活動」を講演いただいた。南氏が活動している「へレン」プロジェクトでは、へしこ作りのワークショップや新しいへしこレシピの提案等、南越前の郷土料理の継承と発信に積極的に取り組んでいる。プロジェクト名の「へレン」は「へしこ」を読み間違えたことがきっかけで命名されたという。へしこが馴染みの薄い食品になりつつあることが伝わるエピソードを逆手に取り、それを冠したプロジェクトを始めた南氏の機転と行動力により、地域の観光振興まで視野に入れた活動へと拡大していく様子が紹介された。登壇者の木元氏が指導する学生らと協働し、科学的な分析と現場での試行錯誤によって調味料を添加せず味を安定させることに成功し、近年では使用後の糠を使い廃棄されていたタケノコの発酵に取り組むなど、地域資源の潜在力の再評価にも取り組んでいる。休憩時間にはへしこの解体・試食も行われ、南氏・メンバーの解説のもと大変活気づいた時間となった。

質疑応答では、応用微生物学を専門とする丸井氏と木元氏がそれぞれの相違について指摘したり、また山崎氏と南氏は若年層の発酵食品に対するイメージや今後の予測について意見を交換した。どの地域も発酵食品の工業製品化や都市部への人口流入等、「食」、ひいてはその原材料を生み出す環境と人との関りが大きく変化しており、異なる専門分野・地域間の意見交換により発酵食品の持つ可能性について考える重要性が示された。



写真1 へしこの解体と試食の様子。



写真2 講演後の質疑応答の様子。

最後に大会を後援いただいた福井県立大学、へしこの解体・試食を実施いただいた「へレン」の皆様、厚く感謝申し上げます。

### 参考文献

- 江原絢子. 2019. 「食文化研究のあゆみと研究方法」日本家政学会誌 70(5): 297-302.
- 石毛直道. 1998. 「なぜ食文化なのか」吉田集而編『講座食の文化 第一巻「人類の食文化」』味の素文化センター:31-52.
- 横山智. 2022. 「フィールド発酵食品学創出に向けて」横山智編『世界の発酵食をフィールドワークする』農文協:214-229.

## JASTE34 託児補助・ダイバーシティ推進サテライト企画開催報告

日本熱帯生態学会ダイバーシティ推進担当庶務幹事 四方 籌(京都大学)

### JASTE34 における託児補助

2024年6月29・30日に開催された第34回日本熱帯生態学会年次大会(JASTE34)は、福井県国際交流会館での対面とオンライン(Zoom)を併用したハイブリッド開催となりました。JASTEでは2018年より大会期間中の託児補助を実施しています。今年度も例年と同様、対象者が利用した託児料金の一部負担というかたちで託児補助を実施しました。また、「ファミリー休憩室」を設置し、子連れの参加者が自由に休憩できるスペースとしてご利用いただきました。大会実行委員長の石丸香苗先生をはじめ大会実行委員会の皆様には、会場のアレンジ等でご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

今回は公開シンポジウム登壇者の方に託児補助をご利用いただきました。遠方にお住まいということで、当初はリモート参加を検討されていましたが、お子さんを連れて福井に来てくださり、会場でご講演いただきました。また、へしこの解体やへしこ料理の試食等、対面ならではのイベントにもご参加いただき、その後の総合討論はとて盛り上がりました。参加者にとっても有意義な機会になったと思います。大会期間中の託児補助の提供は、育児中で大会参加を躊躇している研究者が参加しやすくなるのが大きな利点です。JASTEでは発表の有無や対面/リモート参加によらず託児補助を実施しています。今後も育児中の研究者がより参加しやすい制度を整えていきたいと考えています。学会員の皆様のご理解・ご協力をいただくと幸いです。

### JASTE34 ダイバーシティ推進・サテライト企画「ランチ・ミーティング」の開催

JASTEでは、多様なニーズをもつ会員が参加しやすく魅力的な学会環境となるよう、さまざまなイベントを企画しています。JASTE34では、会員どうしの交流を深めることや情報共有を意図して、大会1日目の昼食時に「ランチ・ミーティング」を開催しました。

初めての試みでしたが、70名以上の参加があり、和気あいあいとにぎやかな会になりました。当日は参加者のお弁当を学会の方で準備し(学生会員・非常勤の若手会員には無料提供)、事前アンケートの結果に基づき、会場に以下4つのテーマ別ラウンドテ-

ブルを設置しました。各テーブルでの自由な交流に加えて、研究ファンドの紹介や学会誌への投稿の呼びかけ等、会員の研究活動促進に向けた情報共有もおこなわれました。

\*ラウンドテーブルのテーマ

- 1) 自然科学系の研究活動とキャリア形成
- 2) 人文社会系, 分野横断型・学際型の研究活動とキャリア形成
- 3) 留学生・帰国留学生の研究活動とキャリア形成
- 4) 分野横断型・学際型の共同研究, 研究発展



写真1 JASTE34 ランチ・ミーティングの様子。

参加者の皆様には概ね好評で、事後アンケートでは「専門の異なる研究者と話ができる貴重な機会だった」、「この企画で知り合った研究者とその後連絡を取り合うようになり、とても有意義な機会だった」、「初めて熱帯生態学会に参加したので、交流の機会が懇親会以外にもあったのはうれしかった」といったコメントが寄せられました。その一方で、「参加者に対する机と椅子の数が少なかった」、「席を自由に移動できるようにしてほしい」、「各セッションから、5分程度のプレゼンテーションがあるとよいと思った」といった要望ならびに改善点の提案があったほか、外国人参加者からは「日本語での会話が理解できないため、期待していたような内容ではなかった」というご意見もありました。皆様からの貴重なご意見を、今後のイベント内容に反映させていきたいと思っております。

ご参加くださった皆様、ありがとうございました。

## JASTE34 評価とダイバーシティ推進に関するアンケート結果報告

日本熱帯生態学会ダイバーシティ推進担当庶務幹事 四方 籌(京都大学)

日本熱帯生態学会会長 神崎 護

日本熱帯生態学会事務局では、第34回日本熱帯生態学会年次大会(JASTE34)の開催後、大会参加者を対象に「JASTE34 評価とダイバーシティ推進に関するアンケート」を実施しました。オンライン上で協力を依頼したところ、JASTE会員・非会員を含む計44名(正会員33名、外国正会員2名、帰国留学生会員1名、連携学会員2名、非会員6名)の方からご回答を寄せていただきました。ご協力くださった皆様、ありがとうございました。

以下では、アンケート結果の概要を紹介し、今後の年次大会の開催方式やダイバーシティ推進を含む学会運営について展望したいと思います。

### JASTE34 評価(報告:四方籌)

回答者44名のJASTE34への参加形態ならびに発表形式の内訳は表1の通りです。

アンケートではまず、大会に対する満足度を項目別に回答していただきました(図1)。いずれの項目も「満足」という回答が最も多かったものの、ポスター発表については、やや満足度が低い傾向が読み取れます。この理由として「対面参加をしていたためオンラインのポスター発表まで見る余裕がなかった」、「ポスターセッションのコアタイムはオンライン上で行うとアナウンスされていたが、実際は対面で掲示されているところに人が集まってしまっていた」、「オンラインでのポスター発表者からコアタイムに反応がなかった」、「オンラインポスターと会場設置のポスターで意見交換できる機会が大きく異なる」といったご意見が寄せられました。また、「オンラインポスターのコアタイムにZoom等で発表者とのビデオ通話ができる形式にするか、ポスター発表を行うのを会場のみにしてもよいのではないか」といったご提案もありました。いただいたご意見を参考にして、次回の年次大会実行委員会に検討していただくことにします。

つづいて、自由記述欄に寄せられたご意見をご紹介します。今回初めて参加されたという外国人参加者の方からは「若手の発表が多く、シニア研究者が建設的なアドバイスをしていたのが印象的だった。他学会のように堅苦しくなく、温かい雰囲気に参加しやすかった」というご意見をいただきました。このような点は、今後も本学会のアピールポイントとしてダイバーシティ

推進に活かしていきたいと思います。また、「優秀発表賞の結果発表を懇親会にしたのは良かった」というご感想がありました(昨年度までは、大会終了後に学会ウェブサイトで公表していました)。審査員の負担や集計時間の確保といった課題はありますが、次回以降も懇親会での結果発表を実施できればと思います。

各項目の課題や改善点としては、プログラム構成の改善(発表言語によらずテーマを考慮したプログラム構成を検討、外国人にとって日本語発表者の司会は困難、発表者の会場への移動を考慮した開始時間の設定)、総会と吉良賞記念講演の時間配分(総会の簡略化、吉良賞受賞者への質疑応答の時間を確保)、懇親会の進行・内容(若手・留学生会員の参加促進、英語でのアナウンス、食事の量・配置を工夫(「食べられなかった」/「残ってしまった」という両方の指摘))等、多くのご意見が寄せられました。

次回のJASTE35(九州大会)では、今回のアンケート結果を活かし、より参加しやすく充実した大会運営・内容となるよう、実行委員会に申し送りしたいと思います。

### ダイバーシティ推進委員会の設置について(報告:神崎護)

ダイバーシティ推進委員会の設置については9割以上(40名)の方から、「意義がある」と回答していただきました。熱帯諸国で多様なテーマで活動する会員で構成される学会ですので、多様性の推進についてはポジティブな考えをもつ方が多いことがわかりました。また、「ダイバーシティ推進委員をお願いした場合、ご協力いただけるでしょうか?」という質問に対し、36%(16名)の方から「協力できる」とご回答いただけたことはたいへん心強かったです。一方で、「学会の規模の割に、役員や委員を担当する人が多いので、あらたな委員の任命は会員に過剰な負担がかかるため、既存の役員・幹事が担当するのが妥当」、「やりかた次第」というご意見もありました。上記質問の回答として、約半数(23名)の方が「わからない」とご回答していたこともふまえると、ダイバーシティ推進委員会は、委員への負担になりすぎない形で運営し、ダイバーシティ推進のためのアイデアを検討・提起していただき、それを執行部が委員会の協力のもと実現していく

ような形で運営していく方向が望ましいと個人的にはかんがえています。

今後の学会運営の課題については、「本学会にフィットした研究者・学生も多いので積極的アピールにより会員数拡大が必要」、「海外在住会員の拡大が必要」とのご意見が挙げられていました。会員数が漸減していく中、会員のリクルートは熱帯フィールド研究の活性化を促すためにも、今後ぜひとも取り組むべき課題だと感じました。

学会への要望としては、調査方法や論文執筆などに関するセミナーの開催、年次大会のハイブリッド開催の継続、大会公式サイト改善、他学会との合同

大会の開催やエクスカージョンの実施、などがありました。さらに、今後の起こりうる問題としては、TROPICS のスコーパス掲載などにより投稿数が増えた場合の対応が提起されていました。まだまだ投稿数が少ないのが現状ですが、将来的には起こりえる問題として、編集委員会でも議論されています。

以上、年次大会に関する回答を四方が、学会運営に関する回答を神崎が簡単に取りまとめました。今後の学会活動に有効に活用していきたいと考えております。ご協力をありがとうございました。

表1. アンケート回答者のJASTE34への参加形態・発表形式(単位:人)

参加形態・発表形式	口頭発表	ポスター発表	発表なし	計
対面参加	25	2	8	35
オンライン参加	0	3	2	5
両方の形態で参加	1	2	1	4
計	26	7	11	44

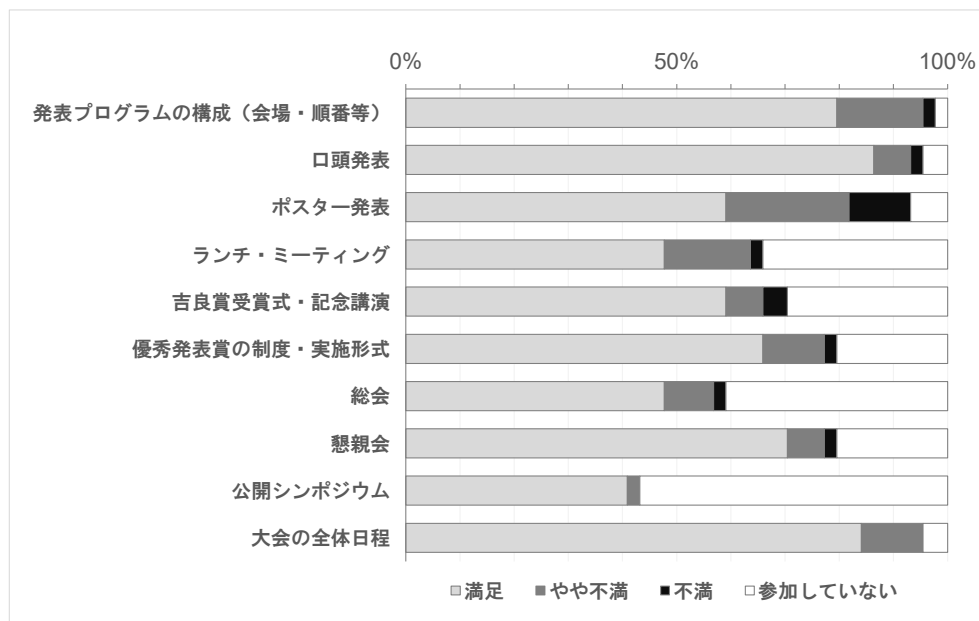


図1. JASTE34に対する満足度 (n=44人).

## 編集後記



カプセルトイのいきものシリーズのオオハシが良くできていると SNS で見かけたので、県内で一番たくさん販売機が並んでいる某モールを訪問してきました。目的のオオハシたちは見つかりましたが、ケース内には 3 個しか残っていませんでした。4 種いるからコンプリートできない！と思いながら、3 個とも購入しました(オニオオハシ×2 羽とサンショクキムネオオハシ 1 羽)。ほかに販売されている場所も知らなかったので、ネット経由で 4 種セットを 2 組、大人買いしました。オオハシ類はカラーリングを変えると同じ型枠で使いまわせそうです。一方、アジアのサイチョウ類だと種ごとにカスクの形がかなり違います。鋳型の使いまわしはできないでしょうし、商品化はちょっと難しそうです。

写真:左からチョコキムネオオハシ, ウスヒムネオオハシ, サンショクキムネオオハシ, オニオオハシのカプセルトイ(2024年11月6日撮影)。

ニューズレターへの投稿は、編集事務局:北村(shumpei@ishikawa-pu.ac.jp)・百村(hyaku@agr.kyushu-u.ac.jp)へ。

## 日本熱帯生態学会事務局

日本大学生物資源科学部国際地域開発学科  
〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866  
Email: jaste.adm@gmail.com

The Japan Society of Tropical Ecology General Office  
c/o College of Bioresource Sciences, Nihon University  
1866 Kameino, Fujisawa, Kanagawa 252-0880, Japan  
E-mail: jaste.adm@gmail.com

## 日本熱帯生態学会ニューズレター 137号

編集 日本熱帯生態学会編集委員会  
NL 担当: 北村俊平 (石川県立大学)  
百村帝彦 (九州大学)

NL 編集事務局  
〒921-8836 石川県野々市市末松 1 丁目 308 番地  
石川県立大学 生物資源環境学部  
環境科学科 植物生態学分野 (C210)

発行日 2024年12月5日  
印刷 株式会社ソウブン・ドットコム  
電話 03-3893-0111